

全員が被災者だからこそ、
同じ気持ちで共に支え合おう

2016年4月、熊本県を震度7の地震が襲い、特に被害が大きかった益城町や阿蘇市では、2箇所の給食センターが被災。そのため小中学校、合わせて約5500名の児童たちが、温かい給食を食べることが出来なくなった。

地震発生の数カ月前から、故郷である熊本で食育の授業を計画していた宮本さん。実施日を決めようとしていた矢先に地震が起きた。延期または中止かと思われた授業だが、関係者からの「このような状況だからこそ熊本に来て欲しい」という声の後押しとなり、2カ月後の6月に、避難所指定されている益城町立広安西小学校を訪問することが決定した。目的はもちろん、「温かくておいしい給食」を届けることだ。

「児童も保護者も職員も、全員が被災者です。皆で支え合って今を生きています。被災者だからと受け身でいるのではなく、積極的に前に進みたい」。力強くそう語る井手校長の言葉通り、避難所の方々のみならず、心強い協力体制のもと準備は進んだ。

宮本さんの呼びかけに、熊本に本社を置く食品メーカー等6社が集まった。参加企業や関係者で話し合い、学校では温かい味噌汁を提供することが決定。こうしてプロジェクトはスタートした。



地元のために自分ができることを、と考えていた宮本さん。生産者、届け手、作り手の想いが詰まった味噌汁を全員によそう

共に作る

給食センターが被災し、温かい給食が提供できなくなった熊本。「児童たちに温かいものを食べてほしい」多くの想いがひとつとなった。

庭料理には、校長の呼びかけからPTA A役員の満田結子さんを中心とした児童の母親たちが集まった。彼女たちは児童たちに温かい汁物を提案したいと考え、いち早く行動を起こしていた。「児童のために何かしたい」。それは宮本さん、企業、そして地元の人々の共通の想いだ。授業に参加したのは、5年生の児童たち。「出汁を引く、という言葉には、食材の良さを引き出すという意味が込められているんです」と、宮本さんは鍋に鰹節を入れる。昆布と鰹節をふつふつと煮出してザルでこすと、黄金色に輝く出汁のでき上がりだ。宮本さんの出汁を引く姿を、児童たちは真剣に見守る。そして次は児童たちの番。今見た工程を思い出しながら、力を合わせて出汁づくりに取り組む。



校長
井手文雄

いでふみお：持ち前の明るさと行動力で、児童たちや保護者、避難所にいる皆さんからも愛される。今回の実施も快く受入れてくれ、母親たちに声かけを行ってくれた



お料理 宮本
宮本大介

みやもと だいすけ：熊本県熊本市生まれ。大阪にある自店はミシュランガイド2つ星を獲得。今回の地震を受けすぐさま行動を決意。熊本のためなら何でもする“肥後もっこす”



力を合わせて完成した 優しくて温かな味噌汁

児童たちが引いた出汁に母親たちが切った食材を入れ、最後に味噌を溶く。そうしてできた味噌汁が、5年生131名に配られた。寸胴鍋の蓋をあけると、湯気と味噌の香りがあたりに広がる。「あったかい」「おいしい」と、満面の笑みを浮かべる児童たち。この日、児童は地元食材のおいしさに改めて気づき、学校だけでなく保護者や地域の方々、地元企業などのたくさんの想いや支え合いがあって初めて、一つのものが完成するということを学んだ。

※2017年4月より、温かい給食が再開されること決定。まだ給食センターの復旧の目途が立っていないため、近隣施設の一部が利用される予定。

〔上左〕PTAのメンバーが中心となり、小さなお子さんを背負いながらも、朝早くから調理に参加してくれた
〔上中〕益城町産の赤茄子、かぼちゃ、大根など、続々と届けられた地元産の野菜
〔上右〕熊本を代表する地元企業の皆さん。地元野菜や海藻ほか、味噌や鰹節等の材料を提供。熊本の児童たちのために立ち上がった。参加企業は、熊本大同青果、フンドーダイ五葉、カネリョウ海藻、西田精麦、山一、アイホー熊本の6社
〔中〕自分で引いた出汁に感動の声を上げる児童。家庭科室は鰹節の香りでいっぱい
〔下中〕久しぶりの温かい味噌汁を口にして、誰もが笑顔に
〔下右〕児童たちが出汁を引き、母親たちが野菜を切り、みんなの力で完成した

DATA
対象地：熊本県益城町
対象校：益城町立広安西小学校
提供食数：800食
米飯給食回数：週3.0回
米飯炊飯方式：委託炊飯
献立方法：統一献立
教科・領域：家庭科